

土地売買の観点からみたエスニック空間の形成過程

—大阪市生野区新今里地区における花街から韓国クラブ街への変貌—

福本 拓

宮崎産業経営大学法学部

本稿の目的は、大阪市生野区の今里新地を事例に、花街として栄えた地域がエスニック空間へと変容する過程を解明し、その含意を考察することにある。分析に際しては、在日朝鮮人による土地取得とその後の韓国クラブの集中経緯に着目し、①資本の由来、②建造環境の変容、③人口移動との関係、④既存住民との接点、の4つの観点から検討した。1960年代以降、花街の関係者から在日朝鮮人への土地移転が進み、特にバブル期以降は賃貸マンションに加えスナックビルも建設され、「ニューカマー」の経営する韓国クラブが急増した。その背景には、花街の衰退のほか、バブル期以前に形成された在日朝鮮人の遊興空間へのニーズ、そして韓国から移入された労働者が居住しうる住宅の存在があった。また、在日朝鮮人の土地取得過程では、エスニック・ネットワークを介した土地取引があり、民族金融機関による融資も一定の役割を果たしていたことを指摘できる。

キーワード：土地売買、エスニック経済、花街、在日朝鮮人、韓国クラブ、大阪市生野区

I はじめに

近代以降の国際人口移動の活発化は、越境的移動の結節点や移民の受け入れ都市においてしばしばエスニック・タウンに代表されるエスニック空間¹⁾を現出させてきた。この事象については移民・エスニック研究のみならず都市研究一般でも多くの関心を集め、中でもエスニック地理学はその空間的形態の解明に取り組み、理論・実証の両面で多くの知見を提示してきた。本稿の目的は、大阪市生野区新今里地区に位置する今里新地を事例に、エスニック空間の形成過程を土地所有者の変遷に着目して明らかにすることにある。

日本のエスニック空間に関する事例研究は、明治期の外国人居留地から植民地主義下で移住した「オールドカマー」²⁾の集住地区、そしてバブル経済期以降に急増した「ニューカマー」によるものまで、既に多くの蓄積がみられる。研究トピックについても、居住地やエスニック・ビジネス³⁾の空間的集中の把握、エスニック・タウンの景観の

変化や機能、外部市場を含む機会構造との関係など非常に多岐にわたる。それらの中でも、特に住宅・テナント貸借や土地取得の詳細は、エスニック空間のより具体的な形成・変遷プロセスを解明する上で有効な着眼点になりうる。

一般に、エスニック集団は経済的（所得）・社会的（差別など）な理由により、不動産市場において不利を被ることが多い。それゆえ、こうした障壁が乗り越えられる経緯に注目することは、エスニック・ネットワークの機能のほか（清水、1994）、エスニック集団とホスト社会との関係を論じる上でも重要である。例えば稲葉（2008）は、東京・新宿の事例から、バブル期以降の空き室増という背景の下、マンション・ビルのオーナーや仲介業者が次第に外国人を重要な顧客と認識し、住宅・テナントの貸借が進んだことを示している。さらに、エスニック・ビジネスの中に同胞⁴⁾を対象とする不動産業者も登場するなど、従来のエスニック・ネットワークに基づく経路以外での入居が可能な状況が生じている（稲葉、2008；稲